

トリオ

作 永山智行

登場人物

土希子
菜里子
志摩子
年江
モリ才
小川

忘れられた場所。

そんな場所が、この地上にはたくさんある。

いつか、すべての人間が地上から去ったとしたら、
ようやくそこは、忘れられた場所ではなくなる。

忘れられた場所。

ここもきつとそうだろう……

—

廃校になった学校の校舎。

裏手には、かつて図工室で使われていたと思しき
椅子や大きな机が、設えられた食卓のように置いてある。

志摩子、歩いてくる。

この場所に初めて来たのだろう。

その風景を、その風景の中から感じている。

志摩子、黒いワンピース。

「里の秋」を口ずさむ。

志摩子、歩いてくる。

志摩子、黒いワンピース。

志摩子 志摩子さん。お茶入りましたから。

志摩子 ……本当にすぐなのね。家からここまで。一分もなかったんじゃないかしら。

志摩子 ええ。

志摩子 裏庭みたいなものね、あなたの家の。それが気に入ってここに
したんでしょ、きつと。

志摩子 はい。

志摩子 人はその人生に相応しい場所で最期を迎える。そんな風に聞いたことあるけど、本当にそうなのかもしれないわね。十年くらい？ここに越してから。

志摩子 いえ、八年ちよつとです。

志摩子 八年。

志摩子 はい。

志摩子 そう。八年か……。何してたかしら、私、八年前。長いわよね、八年って、意外に。

志摩子 そうですね。

志摩子 でも、短いかな、やっぱり。ううん、夫婦にとって、っていう意味ではね。八年って、まだ新婚？新婚っていつまで？

志摩子 ……志摩子さん、向こうでお茶でも如何ですか。

志摩子 居ちゃ駄目かな、ここに、私。

志摩子 いえ、そんなことは……

志摩子 志摩子さん。

志摩子 はい。

志摩子 ありがとう。

志摩子 ……

志摩子 叔母さんは？まだ帰ってらっしゃらない？

志摩子 ええ。

志摩子 吃驚したわね、でも。突然現れて、私、あなたの叔母さんよ、
なんて。志摩子さんは、あの方、ご存じだったの？

志摩子 いえ、私も初めて……

志摩子 聞いたことはあったの？父さんにあんな妹がいるって。

志摩子 いえ、それも……………。

土希子 幾つなのかしら、あの方。父さんの妹だとしても、少し年齢が離れているような気がするし。でも、それならそれで、きつと何かあるんでしょ。結局そうなのよね。私には分からない。父さんの人生がどんなものだったか。私は知ってるわけじゃない。父さんが見てきた全部を。

志摩子 ……………それは、でも、私も、です。

土希子 ……………。

鳥が鳴く。

土希子 ここは静かね。時間が止まって、今は、今この時だけは、何も起きていない。何の悲しいことも、何の虚ろなことも。そんな風に思える。

志摩子 ……………。

土希子 でも戦争ね、この山を降りたら。戦争なんだわ。

志摩子 ……………、お茶、こちらにお持ちします。いえ、いいんです。私たちもよくそうしていましたから。お茶を入れて、ここでよく飲んでいました。お菓子も少し用意して、それから時々歌ったり……………。

土希子 そう。ここで……………

志摩子 ええ。

土希子 (西を向き) 夕日を見ながらね。……………そうしてた。家にいる時も、よく、父さん、そうしてた。

志摩子 ……………お茶、お持ちします。

志摩子、戻っていく。

土希子 ……………でも、まだ夕日の時間じゃない。まだ早い。早すぎる……………。

また鳥が鳴く。

土希子、「もみじ」を口ずさむ。

途中から男の歌声が聞こえてくる。

モリオ、校舎の向こうから歩いてくる。

モリオ (土希子を見て) ……………違う。

モリオ、何事もなかったかのように再び校舎の方へ戻っていく。

土希子、しばらくして、モリオの去った後を追いつ、校舎の方へと歩いていく。

校舎の中から、オルガンを弾く音が聞こえる。

「もみじ」

志摩子がお盆にお茶とお菓子をのせ戻ってくる。けれど土希子はいない。

志摩子 ……………。

椅子に腰を掛け、オルガンに聴き入る。

土希子、いつの間にか戻ってきていた。

土希子 ……これは……………。(オルガンの音を聴いている)

志摩子 高森さんの教え子さんだそうです。小川さん。この近所に住んでらっしゃって、時々、そのオルガンを弾きに……………。

黒いワンピースのもう一人の女、菜里子が歩いてくる。

菜里子 高森さんのお宅はこちらですか。

志摩子 …ええ。

菜里子 志摩子さん。

志摩子 ……ええ、志摩子は私です……

菜里子 ……ええ、葬儀はもう……

志摩子 はい。丁度御昼前に。正午に出棺でしたので。

菜里子 やつぱり間に合わなかったんですね。いえ、時間を間違えてい

たわけではないんです。出掛けに主人から電話があつて用件を頼まれたんです。そうしたらもう、バスを一本乗り過ぎしてしまつて、それから降りるバス停を一つ間違えて、道に迷つて……。そうですか。

そうですね。間に合う。間に合わない。間に合わなかったんですね、私。いいんです。大抵人は、何かに間に合わないものでもすもんね。ただ、顔が見たかった。先生の。体に触れたかった。最後に。

志摩子 ……菜里子さん。そうですか。

菜里子 ええ。お知らせくださつてありがとうございます。それなのに、こんな……

志摩子 ……

志摩子 いえ、いいんです。来ていただいただけでも、喜んでいると思

います。高森さん。

菜里子 でも、みつともなくつて、私。

志摩子 ここは本当に分かりづらいんです。バス停の名前も似たものが多くて、紛らわしいし。

土希子 まだ帰つてこないんです、高森は。だからどうぞ、お掛けになつてお待ちください。

志摩子 私、お茶をお持ちします。

菜里子 いえ、本当にもう、何もいりませんから。

志摩子 でも折角ですから。ちよつと失礼します。

志摩子、戻っていく。

菜里子 ……あの、

土希子 高森の娘です。

菜里子 ああ。……土希子さん？

土希子 ええ。でも……

菜里子 先生がよく手紙の中で、土希子さんのこと書いてらしたんで。

土希子 手紙……

菜里子 可笑しいですよ。今時、手紙なんて。でも、先生、よく手紙をくださったんです。だから私も、よく手紙を書きました。もう長い間、お会いしてはいなかったんですが、手紙だけはずっとやりとりしてました。

土希子 菜里子、さん……

菜里子 はい。

土希子 ……は、平和、なんとか、研究会の……

菜里子 そうです。もう、でも、五年ぐらい前にやめたんですけど、私

も。

土希子 どうして？

菜里子 結婚です。

土希子 ああ。

菜里子 その前に、先生が研究会おやめになったのも、本当はあるんですけど。先生に誘われて、私、入ったもんですから。

土希子 もしかして、菜里子さんも、父の……

菜里子 教え子です。池上中の時の。

土希子 そう。それで父は私のことを何て……？その手紙の中で。

菜里子 他愛もないような話です。土希子さんはこういう食べ物がお好きだったとか、土希子さんが小さい頃の、一緒によく川原で遊んだ思

い出とか、それから、今日は土希子さんの誕生日だとか……

土希子 ……

菜里子 ……あの……

土希子 そんなこと忘れずにいたんだ……。誕生日、だなんて……
……
菜里子 ……毎年、それは書いてらっしゃいました。もうずっと会ってないけど、今年は幾つになった、今年は幾つになった、って……。
土希子 ……覚えてたっけしようがないのに……。

風が吹く。

土希子 ……なんだか不思議なもんね。今し方初めてお会いした人から、自分のことを聞くなんて。自分と、自分がよく知ってると思ってる人のことを。

菜里子 ずっと……。お会いにはなっけらっしゃらなかったんですか
……。

土希子 八年、

菜里子 八年……

土希子 ……そうなんだって。ふふ。さつき、志摩子さんに教えてもらって……。本当は私、そんなに時が経ったことも忘れてた。だって、朝は容赦なく来るんだもの。二十四時間ごとに。父さんがいようといまいと。目を覚まして、その朝を乗り越えて、そうしたらもう、いつの間にか、いろんなことを忘れて、時間だっけ忘れて、自分がどんなに醜くなっけるかもう忘れて……。忘れて、忘れて……。それなのに、急に愛しくなっけた。父さんが本当になくなっけたら、急に、この八年が愛しくなっけた。いい気なもんよね、私。

菜里子 やめてください。

土希子 え？

菜里子 私のことをおっしゃっけてるんでしょ。……。あ、いえ、違いますよね。でも、それ、そんなことおっしゃらないでください。

土希子 ……ごめんなさい。

菜里子 ……。

電話の鳴る音が微かに聞こえる。
菜里子、突然「もみじ」を歌いだす。

二番である。

土希子、途中から副旋律を歌い、和声となる。

歌い終えて、

菜里子 よくご存じですね、二番。

土希子 ええ、まあ……。

菜里子 私、二番の方が好きなんです。なんとなく、ですけど。

土希子 うかがっけてもいい？

菜里子 ……ええ。

土希子 父は何処か悪かっけたの？

菜里子 それはどういっけ……

土希子 つまり体がね。病気だとか怪我だとか……。

菜里子 手紙の中では、そんなことは……。

土希子 そう。

菜里子 万が一そうだっけたとしっけても、多分そのことはおっしゃらなっけた

んじやないでしっけようか。

土希子 そうね。

菜里子 ご病気だっけたんですか、最期は？

土希子 菜里子さん。

菜里子 はい。

土希子 あなたはしっけのことを、父の最期のしっけをこ存じないの？

菜里子 知りません。私、ただ、志摩子さんに御手紙いっけだいて、それ

で慌てて今日……

土希子 手紙。そうね、私も手紙をいっけだいた。志摩子さんに。

菜里子 それで、先生はご病気だっけたんですか？

土希子 さあ。しっけのしっけは、私がいっけだいた手紙には書いっけななっけた。

菜里子 私がいっけだいた手紙にも書いっけありませんでした。

土希子 こんなしっけとうかがうのは恥ずかしいのしっけだけ……

菜里子 ええ。

土希子 父は幾つだったのかしら。

菜里子 今年で丁度還暦だと思います。

土希子 還暦……………。

菜里子 ええ。六十。

土希子 六十年……………。

菜里子 六十年前の夏に生まれ、

土希子 一昨日、死んだ。

菜里子 それが一生なんですね、先生の。

土希子 父さんの……………。

菜里子 私、もしかしたらって、思っていたんです。

土希子 何を？

菜里子 先生の人生。それはなんとなく六十年で終わるような気がして
いたんです。

土希子 どういうこと？

菜里子 理由はないんです。ただなんとなくそんな気がしていただけで。

土希子 六十年で終わる。

菜里子 ……終わらせる。

土希子 誰が？

菜里子 先生、御自身が。

土希子 ……それ……………、それつまり、…自分で自分を……………

菜里子 いえ、すみません。本当に何の根拠もないんです。いつだった
か先生の手紙を読みながらそんな風に思ったことがあって、今日また

ここへ来る時、バスの中でそんなことを思い出したりして……………。

志摩子、いつの間にかお茶を持って戻ってきてい
た。

志摩子 土希子さん、あの……………

土希子 何？

志摩子 (菜里子に) これお茶です。遅くなってすみません。

菜里子 ……いえ。

志摩子 (土希子に) お電話があったんです。

土希子 誰から？

志摩子 それはおっしゃらなかったんですが、土希子さんはいらつしや
るか、と。男の方の声で。それで、私が、しばらくお待ちいただけ
ば、お呼びいたしますと言ったんです。それなら伝言でいいからお
っしゃって……………。「飛行機がまだ飛ばない」、って……………。

土希子 ああ。…兄さんよ。兄さんとその妻と、…母さん。

志摩子 ……。

土希子 来るつもりなんだと思う、ここに。今、三人で余所に住んでい
るから。

志摩子 ……。

土希子 ごめんなさい。私も本当は知らせるつもりはなかったんだけど、
昨日、たまたま電話がきて、それでつい……………。ごめんなさい。

志摩子 ……いえ。

土希子 志摩子さんの方から、連絡はされていないでしょ。

志摩子 (頷く) 手紙をお出したのはお二人だけです。それは、高森

さんが、お二人にだけは知らせて欲しいとおっしゃって……………。

菜里子 ……私たち、だけなんですか？

志摩子 ええ。

土希子 本当にごめんなさい。

志摩子 いえ、それはもういいんです。…私はでも、つつきり、まだ御
一緒にいらつしやるのかと……………。

土希子 最初に家を出たのは、兄さん、…いえ違うわね。父さんね。父
さんが、あなたと……………。それからすぐに兄さんも結婚することにな
って、私と母さんだけになった。それから……………。私。私も結婚した。
結婚、してた。だから、母さんは兄さんたちの所へ 行くことになっ
て、あの家には誰もいなくなった。私が帰ってきたのは、半年前。桜
の頃、だったと思う。

志摩子 すみません。

土希子 何が？

志摩子 ……

土希子 何が？

志摩子 ……私……

土希子 関係ない。それはあなたとは関係ない。家族はいつか離れる。

父さんがいようと、いまいと。

志摩子 ……

土希子 ……でも、そうね。もう、あの家で、私が子供だった時みたいに、四人で食卓を囲むなんてことは、できないのね……

黒い和服の年江が、骨壺を入れた白木の箱を手にして歩いてくる。

年江 高森千吾は死んだ。享年六十歳。

年江はゆつくりと机のところまで進み、箱を置く。

年江 はい、ただいま。やっぱり駄目ね。きちんと食べないと。朝、ほら、軽くすませてきちゃって、それで、御昼は食べられなかったでしょ。これ（骨壺）持つてる時も、もう、ずっと御腹が鳴っちゃって。きつと笑ってたわね、千ちゃん。

年江は喋りながら、お茶とお菓子に手を伸ばす。

年江 （菜里子を見て）あら、こちら、今いらつしやったの？

菜里子 あ、はい。

年江 もしかして、…菜里子さん？

菜里子 ……はい。

年江 あ、そう。あなたが。ううん、千ちゃんがね、いつもあなたのこと

と話すもんだから、どんな方かなって…。…はじめまして、私、千ちゃんの妹の年江です。二人（志摩子と土希子）はね、もう「年江ちゃん」って呼んでくれてるんだけど。

志摩子と土希子、年江を見る。

年江 冗談よ、もう。（菜里子に）ねえ。ふふふ。

菜里子 ……

年江 ……でもこれで、ようやく三人揃ったわけね……。じゃあ、早速歌いましょうか。

土希子 え？

年江 歌よ、土希子ちゃん。あなたたち三人に、歌って送りだして貰いたいよ、千ちゃんは。（骨壺に）ごめんね、折角だから私も歌うわね。さ、何歌いましょうか。

校舎の中から、オルガンの音が聞こえる。

「仰げば尊し」

年江 ……そうね、先生だったんだもの、千ちゃん。ありがとう、小川君。

再び前奏。

年江に引つ張られるように歌う、志摩子、土希子、

菜里子。

白木の箱に向かって……

歌の途中で、校舎の向こうからモリオが歩いてくる。

しばらく四人の女を見ていた……

菜里子が「鳥の唄」を口ずさんでいる。
モリオが見ている。

モリオ 一体何の歌なんです？あなたはいつもそれを口ずさんでいらっ
しゃった。あの頃も。

菜里子 今、何時ですか？

モリオ 僕は時計は持たないんです。それは今も変わりません。あの頃
からそうでした。覚えてはいらっしやらないでしょうけど。

菜里子 覚えています。

モリオ ……そうですか。

菜里子 ええ。…でも私、やっぱりそろそろ帰らなくちゃ。

モリオ 見かけたんです、バス停で。あなたがそうやって喪服を着て、
バスに乗るところを。そしたらなんだか、居ても立っても居られなく
なっつて。

菜里子 ……。

モリオ すみません。

菜里子 いえ。

モリオ 高森さんだったんですね。亡くなったの。

菜里子 ええ。

モリオ 知っていれば僕も、準備してきたんですが……………。吉井さんた
ちは、ご存じなんでしょうか。

菜里子 多分知らないと思います。

モリオ そうですか。

菜里子 続いているんですか、きちんと。

モリオ さあ。僕も、もう活動はしていません。あなたがいなくな
つて、それから、あの木下さんの一件もあつて……………

菜里子 ああ……………

モリオ 長い時間が、もう経ったんです。高森さんがいなくなり、それ

から木下さんも……………。あなたは結婚し、僕ももうなんだか疲れまし
た。

菜里子 ……。(モリオの顔を見る)

モリオ どうしたんです？

菜里子 あなたがそんなことをおっしゃるなんて…………。「疲れた」だ
んて…………。

モリオ けれど仕方ないんです。僕はもう疲れてしまった。

菜里子 先生がいなくなった後は、きつとあなたが会を引つ張っていっ
てくださるんだと思っていました。それは私だけではなく、殆どのみ
んなが。あなたは、優しく、ユーモアがあつて、何より、若く、行動
力があつた。

モリオ 昔の話です。

菜里子 それにあなたは…

モリオ だって、

菜里子 ……

モリオ ……あなたは結婚してしまつたじゃないですか…………。

菜里子 ……。

鳥が鳴く。

モリオ ……元氣、でしたか。

菜里子 ええ。

モリオ そうですか。良かった。

菜里子 ……お元氣、でしたか？

モリオ まあ、なんとか。

菜里子 そうですか。

モリオ 傷はもう大丈夫なんですか、胸の。

菜里子 やっぱり跡は消えないままです。でも、もう前のように痛んだ
りはしません。

モリオ ふふふ。

菜里子 どうしたんですか？

モリオ あの時は本当、大変だった。あなたは血を流しながら、けれど必死に抗議していた。高校生のあの、満代ちゃんはずっと泣きっぱなしで、でも吉井さん達は相変わらず、焼酎飲んで酔っ払って……、確かそう、雨も降りだして……

菜里子 雨は、また別のデモの時でした。あの時は、星がとっても綺麗で、なんだかそれだけは覚えているんです。

モリオ そうでしたっけ？

菜里子 ええ。あなたは私を負って近くの病院まで運んでくださった。

私はあなたの背中から、ふと空を見上げたんです。星が輝いている。

私はこのまま死ぬのかなあ。…なんてことを考えながら。

モリオ そうですか。

菜里子 ええ。

モリオ ……思い出すことはあるんですか、今も時々、そんなこと。

菜里子 ……ありません。

モリオ 帰りましょうか。

菜里子 何処に？

モリオ その夜に。

菜里子 ……どうやって？

モリオ 僕があなたを背負います。そしてそのまま行くんです。

菜里子 何処へ？

モリオ それは僕にも分かりません。

菜里子 ……。

モリオ 立ち上がってください、菜里子さん。帰りましょう。

菜里子 ……私……

モリオ ……

菜里子 ……今、何時なのかが知りたい……

モリオ ……。

モリオ、座る。

モリオ、口ずさむ。

「告別」

モリオ ……僕はでも、まだあなたを愛しているような気がします。

菜里子 ……。

モリオ そんなこと忘れていたのに、バス停であなたを見て、それなんだか、道を間違えてたことに気づいたんです。ああ、こっちじゃない。そのバスの行き先が僕の行き先だって。

菜里子、立ち上がり、行こうとする。

モリオ、慌てて立ち上がり、菜里子の手を掴むと、後から抱く。

菜里子は動かない。

モリオは動かない。

ほんの僅かな時間。

モリオは、ゆつくりと菜里子から体を離す。

モリオ ……鳥になった男の話、覚えてますか。高森さんがよく話してらっしゃった。鳥になりたいと、毎朝空を見上げて願っていた男が、ある朝目覚めると、本当に鳥になっていた。男は恐る恐る羽根を動かしてみる。ふわりとその体は浮き上がり、やがて大空へと舞う。そして、それから先、男はその羽ばたきを一度も止めなかった。木の枝に留まり身を休めることもなく、ひたすら羽ばたき続けた。鳥であり続けるため。やがて力尽きた男は、ついにその羽ばたきを止め、地上へと落ちていった。翌朝、街の人々は、道端に冷たくなった一人の男を見つける。そして、その時、男は元の人間の姿に戻っていた。

…近頃僕は、この話をよく思いだすんです。何でだかは分からないんですが…。

モリオ、羽ばたいてみる。

モリオ ……こうやって羽ばたけば僕も……、僕も鳥になれるでしょうか。こうやって……

モリオ、羽ばたく。

見つめる、菜里子。

校舎の方から、笛の音が聞こえてくる。

「家路」

菜里子 ……バス停に行ってきました。いえ、帰るんじゃない。時間を見てくるだけです。

菜里子、軽く頭を下げて去る。

取り残されるモリオ。

土希子が、家の方から歩いてくる。

土希子 叔母さん、こちらにいらっしやってない？

モリオ 叔母さん…

土希子 年江さん。あの和服の…

モリオ さあ。見かけませんでしたか。

土希子 そう……

モリオ 何か？

土希子 ううん。後で私たちにお話があるっておっしゃってたものだから。

モリオ そうですか。

土希子、校舎の方へ歩きだす。

モリオ あの、

土希子 (立ち止まる)

モリオ ……先程は失礼しました。気づきませんでした。

土希子 一度きりですもの、お会いしたの。六年前の結婚式。無理もないと思う。

モリオ すみません。

土希子 こんなところで会うなんて……

モリオ まさか高森さんの娘さんだとは……

土希子 お元氣、お兄さん。

モリオ 分かりません。兄とはもう十年来疎遠なままで。一度大喧嘩をしたことがあって、それ以来喋ってもいないんです。

土希子 そう。似たようなものね。ううん、私も私の兄と反りが合わないくてね。

モリオ 確か、郡山か何処かにいるように聞いたんですが。

土希子 そう。

モリオ あの兄の結婚式の時も、本当は行くつもりはなかったんですが、母に懇願されて、それでしようがなく……

土希子 それであんなに不機嫌そうな顔をしてらっしやったのね。

モリオ 覚えてらっしやるんですか？

土希子 だって目立ってたもの。一人だけ、ムスツとしたまま料理に手もつけないで。

モリオ ああ。そうでした。

土希子 顔は……、やっぱり似ているのかしら。

モリオ いいえ。似てません。

土希子 ……そうね、似てない。

モリオ 母に聞いたんです。お子さんがいらっしやったんでしょ。

土希子 ……

モリオ ……すみません。この話は止めます。

土希子 いいの。続けて。

モリオ ……………。

土希子 お母さんは何て？

モリオ ……………その子が、ある日急に亡くなって、それで、それが原因で兄と別れたって。

土希子 ……………随分簡単な話ね。

モリオ すみません。

土希子 いなくなつたのよ、あなたの兄さん。あの子がある日突然いなくなつたように、あなたの兄さんもある日突然、私の前から消えていった。私、分からない。私にはそれしか分からない。もしかしたら、そう、やっぱり簡単な話なのかもしれない。

モリオ 手

土希子 え？

モリオ 握っていいですか。

土希子 え？

モリオ 握っていいですか、手。

土希子 え？

モリオ、土希子の手をとり握る。

モリオ ……………すみません。

土希子 ……………

モリオ 兄の分じゃありません。ただ、誰かの代わりに、僕はあなたに謝りたい。…………すみません。

土希子 ……………

モリオ、ゆっくりと土希子の手を離す。

土希子、その手でモリオの頬を打つ。

モリオ ……………。

土希子、そのまま校舎の方へと歩いていく。

モリオ、再び「告別」を口ずさむ。

自分の頬を何度も打ちながら…………

志摩子が家の方から歩いてくる。

志摩子 (モリオに) すみません、お待たせして。

モリオ いえ。

志摩子 もう整いましたので、よろしければお線香でもあげてください。

モリオ はい。(行きかけて) あの、

志摩子 はい。

モリオ バス停は近いんですか。

志摩子 ええ。表の通りまでお出になればすぐです。

モリオ この時間、山を下りるバスはありますか？

志摩子 ええ。つい今し方出たところだと思いますけど。

モリオ ……………

モリオ、何も言わず去っていく。

志摩子 ……………。

校舎の方から笛の音が近づいてくる。

年江が、縦笛を吹きながら歩いてくる。

年江 (志摩子に) ねえねえ聴いてた？さっきの、私の。まあ、吃驚した、自分でも。だってね、もう、そう、かれこれ二十年以上前でしょ、最後にこれ触つたの。それでも、なんとなく吹けちゃうんだから。やっぱり凄いわね、子供の時の記憶っていうは。こう、体が覚えてるのね、指だとか、息遣いだとか。ちゃんと生きてるのね、私の中に、十歳の頃の私が。十歳の可愛い私が。

志摩子 ふふ。

年江 何笑ってるのよ。

志摩子 いえ。…何の曲だったんですか。

年江 ほら、あれよ。あの、…「新世界」。

志摩子 え？

年江 ううん、違う。何ていったっけ題名。…志摩子さんは、学校時分

どんな歌がお好きだったの？

志摩子 私は……………

年江 十歳の可愛い志摩子ちゃんは。

志摩子 ふふ。

志摩子、少し考えて「ふしぎなほけつと」を口ずさむ。

途中から、オルガンの音加わる。

年江、着物の袂から鈴を出し、志摩子に持たせる。

そのまま縦笛を吹き始める。

「森へ行きましょう」

オルガンも加わり、志摩子は年江に指示されるま

ま鈴を鳴らす。

校舎の方から戻ってきた土希子が、それを見る。

土希子 何してるんです？

年江 んー、ちよつとした音楽会ってところね。十歳の私たちによる。

土希子 え？

志摩子 ふふ。

土希子 音楽室から持ってきたんですか、それ。

年江 そ。あ、あなたの分もあるわよ。

年江は、着物の袂から、トライアングルとカスターネットを出す。

年江 どっちがいい？

土希子 ……。

年江 じゃ、土希子ちゃんはこっちね。(と、トライアングルを渡す)

土希子 叔母さん。

年江 「年江ちゃん」

土希子 ……。

年江 恥ずかしいんだったら、まだいいわ。でも、そのうちね。焦らなくていいから。

土希子 ……、話があるんじゃないんですか？

年江 何の？

土希子 ……だつて、叔母さんそうおっしゃったじゃないですか。三人に、…私と、志摩子さんと菜里子さんと、話しておきたいことがあるって。

年江 ああ、そうそう、そうだった。でもやっぱり三人揃ってからがい

いんじゃないかしら。それまで音楽会でもしましょうよ、ね。さん、

はい。(縦笛を吹こうとする)

土希子 それは、やはり父さんのことなんですか？叔母さんのその話。

例えば、何かその、遺言めいたこととか。

年江 そんな大袈裟な話じゃないわよ。大丈夫。後でまたゆっくり話すから。

土希子 でも…

年江 あのね、答えなんかじゃないのよ。それであなたの何かが変わるとか。

土希子 そんなこと……………

年江 焦らないでみてよ、土希子ちゃん。ほら、よく言うじゃない、「答えを探す間に起きる出来事、それが答えだ」って。(志摩子に) ねえ。

志摩子 ふふ。

年江 また笑ってる。

志摩子 ……高森さんが、よく、それ、その言葉おっしゃってました。

年江 あは。そうなのよ。ごめんなさいね。千ちゃんの受売りなのよ。

あは。

土希子 ……。

年江、縦笛を吹きながら立ち上がり、校舎の方へと歩きます。

年江 (立ち止まり) えー、只今より、十歳の可愛い私たちによる、可愛い音楽会を音楽室にて行います。十歳の可愛いみなさんは、音楽室に集まってください。

年江、縦笛を吹く。

年江 行こ。十歳の可愛い志摩子ちゃん。十歳の可愛い土希子ちゃん。

年江、縦笛を吹きながら歩いていく。

志摩子、鈴を鳴らしながらついていく。

土希子、しばらくの後、トライアングルを一つ鳴らし、校舎の方へと歩いていく。

菜里子が戻ってくる。

座り、「鳥の唄」を再び口ずさむ。

モリオが帰ってくる。

菜里子 帰るんじゃないやありません。そう、申し上げたじゃないですか。

モリオ ええ、そうでした。

菜里子 もしも、

モリオ ……ええ。

菜里子 もしも、私が先刻のバスで帰ったとしたら……

モリオ ……ええ。

菜里子 モリオさん。…やはり、私を追いかけますか？

モリオ ……、ええ。

菜里子 何のため。

モリオ ……、何のため、でもなく。僕はもう鳥になってしまったんです。喪服のあなたをバス停で見かけたあの瞬間から。だから、後は、もう羽ばたき続けるしかないんです。休むことなく、木の枝に留まることもなく、ただ羽ばたく。僕が鳥であり続けるために。

菜里子 モリオさん。

モリオ はい。

菜里子 あなたは人間です。

モリオ ……。

菜里子 ……それから、…私も……。

モリオ ……。

菜里子 やっぱり木下さんのおっしゃったことが正しかったのかもしれない。

ない。

モリオ 木下さんのおっしゃったこと……。

菜里子 私、叱られました。結婚して、会を辞める時。木下さんに。行動しなければ、平和は生まれなくて。

モリオ ああ。

菜里子 だけど、私には、そうは思えなかった。行動しても何も変わらない。それよりも寧ろ、個人の幸福、例えば家庭というものの中から平和は生まれてくる、そんな予感があった。

モリオ そうしてあなたは結婚した。

菜里子 平凡な人です、確かに、あの人は。平凡で、けれど、穏やかで。

それから子供が生まれて、平凡な家庭になって……。

モリオ 平和ですね。

菜里子 朝、六時、目覚める。お米を研ぎ、ご飯を炊く。朝食とそれか

らあの人のお弁当をつくる。七時、朝食を子供と三人で食べる。あの
人と子供は出掛ける。朝食の後片付けをする。九時、前の日着ていた
服を洗濯する。十時、部屋の掃除をする。十一時、私だけのお昼ご飯
の支度をする。十二時、お昼を食べる。後片付けをする。二時、少し
出掛ける。足りない野菜と家庭のあれこれの買い物をする。四時、洗
濯ものを取り込む。五時、晩ご飯の支度をする。お米を研ぎ、ご飯を
炊く。野菜と、お肉の料理をつくる。七時、あの人と子供と三人で食
べる。後片付けをする。お風呂に入る。布団を敷いて寝る支度をする。
九時、どこかに爆弾が落ちる。十一時、暖かい毛布の中に体を横たえ、
静かに目を閉じる。それから、また、朝、六時、目覚める。…そうし
ていつの間にか五年が過ぎた。私は、一体、何をしてきたんですか。
平和は訪れたんですか。それなら何故、今日もどこかに爆弾が落ち、
私のあの子と同じ年の子が死んでいかなければならないんですか。私
の生活は、静かで、穏やかで、正確で……、いいんですか、それで
私は。

モリオ ……よくない、はずはない。

菜里子 ……同じ、なんですね。

モリオ 何がです？

菜里子 先生と。私が木下さんに反発して、結婚で会を辞めた時も、そ
れから時々いただく手紙の中でも、「それがよくないはずはない」って、
いつもおっしゃってました、先生。

モリオ 高森さんが…。

菜里子 ええ。

モリオ そうですか…。

菜里子 やっぱり何処か似てらっしゃるのかも、先生に。

モリオ 僕はある風にはなれない。あんなに、強くは。

菜里子 でも、もう先生はいらっしやらないんです。誰かが代わりに…

モリオ なれません。誰も代わりににはなれないんです。

菜里子 ……、そうですね…。

鳥が鳴く。

菜里子 ……「よくない」って、おっしゃれば良かったのに。

モリオ え？

菜里子 先刻。私のこと。そうすれば私…。

菜里子、モリオを見る。

菜里子 ……どうしてそうおっしゃらなかったんですか。「よくない」
って。

モリオ ……分かりません。…きっと僕も、平凡な人間なんです。

もう一度鳥が鳴く。

菜里子 もしも、

モリオ ……。

菜里子 もしも、もう次のバスが出ないのだとしたら…。

モリオ ……。

菜里子 そして、あなたの車も止まり、それから飛行機も飛ばず、空に
はただ鳥だけがいて……、そうだとしたら、私達はここで生活を始
めるんでしょうか。お米を研ぎ、お湯を沸かし、野菜を切る。私達は
一枚の毛布に身を包み、静かに目を閉じる。そうして、また、朝、六
時、目覚める。よくない、はずはない、その生活。それをここで始め
るんでしょうか。

モリオ ……分かりません。

菜里子 ……。

モリオ 分かりません。ただ……。もしそうだとしたら、…この空
に飛ぶものが、鳥だけだとしたら、…もう、爆弾は落ちないのもし
れません。この地上の何処にも……。

菜里子 ……。

校舎の方から、縦笛の音が聞こえる。

モリオ 行きましょう。

菜里子 何処に？

モリオ 高森さんに、お線香をあげに。

菜里子 …ああ、…そうですね。

二人、家の方へと歩いていく。

突然、大太鼓の音が入り、急に演奏が盛り上がる。
年江の歌声も聞こえる。

…
思わず立ち止まり、聴き入るモリオと菜里子……

三

誰もいない。

校舎の方からオルガンの音が聞こえる。

「鳥の唄」

志摩子の声も聞こえる。

年江が家の方から歩いてくる。
座る。

しばらくして、菜里子が家の方から歩いてくる。

菜里子 …あの、こちらでいいんですか。

年江 (頷いて、席を指し) どうぞ。

菜里子、言われるままに座る。

しばらくして、土希子が家の方から歩いてくる。

土希子 …志摩子さんは………?

年江 もうすぐ来ます。(席を指し) どうぞ。

土希子、言われるままに座る。

しばらくして、志摩子が校舎の方から歩いてくる。

志摩子 すみません。遅くなりました。

土希子 大丈夫。私も今来たばかりだから。

菜里子 私もです。

年江 (席を指し) どうぞ。

志摩子、言われるままに座る。

年江、軽く咳払い。

他の三人は、なんとなく居住まいを正す。
沈黙。

志摩子 ……あの、

年江？

志摩子 私、お茶いれてきていいですか。

年江 (途端にくずれて) そうよねー。そうそう。何か足りないないなーつて私も思ってたのよ。そうそう、お茶ね。お茶とお菓子よね。ありがとう、志摩子さん。

志摩子 いえ。すぐ戻ってきます。

志摩子、家の方へと戻っていく。

菜里子 ……あの、私、結局よく分かっていないんですが、これは、
どういう……………?

土希子 叔母さんがね、何か私達三人にお話ししておきたいことがあるんだって。

年江 大した話じゃないんだけどね。

土希子 菜里子さんは、次のバスでお帰りになるの？

菜里子 ええ。

土希子 時間は。まだ大丈夫？

菜里子 ええ。しばらくでしたら。

年江 大丈夫。すぐ終わるから。

菜里子 土希子さんは、今日はやはりずっとこちらに？

土希子 ……、まだよく考えてなかった。…でも、多分、帰ると思う。

菜里子 そうですか。

土希子 モリオさんは？今、どちら？

菜里子 先生のところをいらつしやいます。

土希子 ああ。どうなさるのかしら、あの方。

菜里子 さあ……………。

年江 なかなかいい男よね、あの人。(菜里子に) ねえ。

菜里子 どうでしょうか……………。

年江 いい男よ、あの人。まだきちんと喋ってないけど。私だったら、
放っておかないけどなあ。

土希子 そうすればいいじゃないですか。声をかけてみれば。

年江 あら、そうよね。そうしてみようかしら。

土希子 いいんじゃないですか。

年江 似てるのよね。

土希子 え？

年江 ううん。誰ってわけじゃないんだけど……………、誰かに。昔会ったことのある人。きっと優しい人。優しく、懐かしい、誰か。

鳥が鳴く。

菜里子 年江さんは、お子さんは…

年江 あら。

菜里子 え？

年江 そう見えるのね、やっぱり。ごめんなさいね、私、独身なの、
だ。

菜里子 すみません……………。

年江 四歳？

菜里子 ？

年江 かの子ちゃん。

菜里子 あ、はい。…え？

年江 菜里子さんにそっくりよね。鼻のこの辺りとか。本当可愛らしくて。

菜里子 あ、どこで……

年江 ほら、あなた、千ちゃんに写真送ったでしょ、かの子ちゃんの。それ見せてもらったの。

菜里子 ああ。

年江 もう大分大きくなったんじゃない、あの写真の頃より。

菜里子 ええ。でも、段々と言うことを聞かなくなつて。

年江 聞かないものよ、子供はね。親の言うこと。そうだったでしょ、菜里子さんも。そうやって大きくなったんでしょ。

菜里子 ええ、まあ。

年江 でも、…元気に育って欲しいわね。親の言うことなんか聞かなくても、ただ、元気に……。(土希子に) ね。

土希子 …ええ。

年江 (そつと土希子の手を握る)

土希子 ………。

年江 あ、そうだ。はい、これ、おみやげ、かの子ちゃんに。

年江、袂からカスターネットを取り出し、菜里子に渡す。

菜里子 これ……

年江 いいからいいから。遠慮しないで取っておいて。

志摩子が、お盆にお茶とお菓子をのせ、戻ってくる。

年江 (志摩子を見て) あー、ありがとう、志摩子さん。

志摩子 いえ。

年江 ごめんなさいね。疲れてるのに、なんだかこき使っちゃつて。

志摩子 いえ。

年江 もし、何だったら、休んでもいいのよ。あ、そうだ、私、お布

団敷きましようか。

志摩子 いえ、大丈夫です。ありがとうございます。

年江 そう?でも、言つてよ、いつでも。もし疲れたんなら。

志摩子 はい。その時は。

年江 甘えていいんだからね。こんなおばさんだけど。

志摩子 はい。

年江 だつてね、私、あなたの妹なんだから。

志摩子 え?

年江 義理のね。私の兄さんの奥さん、だから。

志摩子 ああ。

年江 ね、義姉さん。

志摩子 ふふ。…はい。

志摩子、座る。

志摩子 …すみません。

年江 じゃ。

四人、なんとなく居住まいを正すと、電話が鳴る。

志摩子 ………すみません。

志摩子、家の方へと戻っていく。

土希子 父さんは六十でした。

年江 ………ええ。

土希子 私のあの子は二歳でした。

年江 ………。

土希子 大雨が降った次の日、水嵩の増した用水路に落ちました。

年江 ……………。
土希子 父さんは何処か体が悪かったんでしようか。それとも、そうじやなく……………
年江 ……………何？
土希子 ……死のうとしたんじゃないんですか、例えば、…志摩子さんと一緒に。
年江 ……………どうして、そう思うの？
土希子 どうして……………。どうしてでしょう……………。
年江 ふふふ。
土希子 ？
年江 あなたたち、本当によく川原に散歩に行ってた。…千ちゃんと、十歳のあなたと。夕方の川原の土手を、手をつなぎながら。私、千ちゃんに何回も言ったわ、たまにはもっと気の利いた処に連れていってあげたら、って。そうしたら、「だって土希子が行きたいって言うから」って。いつも……………。本当にそうだったの？本当に土希子ちゃんが「行きたい」って言うてたの？
土希子 ……………さあ。……………よくは、覚えてないです。
年江 そうよね。もう随分昔の話だものね。…でも土希子ちゃん、本当に大人になったわね。なんだか不思議な感じ。十歳の土希子ちゃんがここにいて、千ちゃんはもういない……………。
土希子 苦しくはなかったんですか。父さんの、最期の、その瞬間。
年江 ううん。…静かに、笑ってた。
土希子 悔しくもなかったんですか。
年江 (頷いて) 本当に穏やかだった。
土希子 私の名前、呼んでくれたんですか。十歳の私の名前。
年江 呼んだわ。きつと。十歳のあなたの名前。
土希子 ……………

土希子、嗚咽を堪えながら泣いている。

土希子 ……………どうしてみんな私の前からいなくなってしまうんですか。あの子も、父さんも、あの人も……………。その度、私の世界から色が消えていくんです。そんな世界で生きるために私は生まれてきたんでしようか。私はここに何をしにやって来たんですか。……………帰りたい。……………叔母さん、私、帰りたい……………。十歳に……………

土希子、泣く。

年江 ……………あらあら、駄目ねえ、土希子ちゃんは。こんなに大きくなつたのに、相変わらず泣き虫さんで……………。

年江、手拍子を始め、歌いだす。

「グリーングリーン」

菜里子も年江に促され、カスタネットを叩く。

志摩子が戻ってきていることに気づいて、年江は歌を止め、

年江 あ、お帰りなさい。電話、誰からだったの？

志摩子 あの、土希子さんのお兄様からだと思うんですが……………

年江 ああ。

志摩子 (土希子に) それであの、電話、お代わりするようにおっしゃってるんですが……………

土希子、頷き、立ち上がる。

そのまま、家の方へ歩いていく。

年江 ……………志摩子さんもお掛けになって、少しお休みになったら。

志摩子 はい。

菜里子 (年江に) すみません。

年江 何が？

菜里子 土希子さんのこと。私、何も知らなくて……………。

年江 当たり前よ。今日、初めて会ったんだから。

菜里子 そうなんですけど……………。志摩子さんはご存じでしたか。

志摩子 何を？

菜里子 土希子さんのお子さん、亡くなったって。

志摩子 いえ……………。

年江 セ・ラ・ヴィ。

そう言つて、年江、動かなくなる。

菜里子 ……………。何ですか、それ。

年江 おまじない。…かな。人生が辛くなるための。

菜里子 ……………。

年江 もういいかしら？

菜里子 ……………。どうぞ。

志摩子 ふふ。

年江 さあさあ、お茶でも飲みましょう。折角志摩子さんがいれてきてくれたんだから。それからお菓子もね。

志摩子 どうぞ。

年江 いただきます。

菜里子 ……いただきます。

お茶を飲む。

年江 (志摩子に) どんな様子だった、土希子ちゃんのお兄さん。
志摩子 なんだかとても急いでらっしゃるよう……………。

年江 そう。いつもそう、あの人は。私がこう話をしてるでしょ。そしたら最後まで絶対聞かないのよ。途中で必ず「それで？」って入れてくるの。「それで？」って言われてもねえ……………。私の話に結論なん

てないんだから。

志摩子 ふふ。

年江 歩いて行こうが、走って行こうが、辿り着くところなんて同じなのね。

志摩子 セ・ラ・ヴィ……………

年江 そうそう。…あら、ちよつと。美味しい、このおかき。どうしたの、これ？

志摩子 それは、菜里子さんが。

年江 そう。(菜里子に) ありがとう。

菜里子 (首を横に振り) 確か、先生がお好きだったように覚えていたの。

年江 ふうん。(食べている)

菜里子 ……………。私も少しいたきます。

年江 どうぞどうぞ。ほら、あなたも、志摩子さん。

志摩子 じゃあ。

三人、食べる。ぼりぼりと……………

年江 もう、話、しちやいましょうか。

菜里子 でも、土希子さんがまだ……………

年江 実はね、私、……………

菜里子 ……何ですか？

年江 ……………。これ大好きなの、おかき。もっと食べていいかしら？

志摩子 ふふ。どうぞ。

菜里子 もう、おどかさなくてくださいよ。

年江 でもね、菜里子さん。千ちゃんが言つてたことがあるの。あなた本当は……………

菜里子 ……はい……………

年江 甘いものが好きでしょ。

菜里子 ……ええ、まあ……………。

年江 うん。

菜里子 …え？

年江 うん。

菜里子 …いや、それだけですか？

年江 うん。

菜里子 もう……………。

年江 あ、やっと笑った、菜里子ちゃんが。

菜里子 ……………え。

年江 いいのよ、笑って。笑い続けて。

菜里子 ……………。

モリオ、家の方から歩いてくる。

モリオ お話中すみません。

年江 ううん。いいのよ。

モリオ (菜里子に) 時間、貰えますか。

菜里子 (頷く)

モリオは、校舎の方へと歩いていき、菜里子もその後を追う。

年江 (見送って) なんだか、少しだけ失恋したみたいなき分だわ。

志摩子 ふふ。

年江 (志摩子を見て) ふふふ。

土希子が、家の方から歩いてくる。

土希子 (見て) 今度は菜里子さんね、いらっしやらないのは。

年江 お兄さんは、何て？

土希子 嫌な話。なんだか何かがあって急に空港が閉鎖された。それで

やっぱり飛行機が飛ばなくてここに来られない。だから……………、私が、確認を……………

年江 何の？

土希子 父さんの死因だとか財産だとか… (志摩子に) 本当にごめんなさい。

年江

それをあなたにしるって？

土希子 (志摩子に頭を下げたまま) ごめんなさい。そういう人なの、あの人たち。

志摩子 頭、あげてください。

土希子 だって情けなくて、私。

志摩子 土希子さんの大事なお兄さんじゃないですか。それに、高森さんの大事な息子さん。

土希子 ごめんなさい。

志摩子 土希子さん、私に、私なんかには頭下げないでください。

土希子 ごめんなさい。

志摩子 お願いします。でないと私また、死にたくなくなってしまいます。

土希子 …………… (顔を上げる)

鳥が鳴く。

志摩子 (土希子に) お茶をどうぞ。菜里子さんが持ってきてくださっ

たこのおかき、とっても美味しいんです。

土希子 ……そう。じゃあいただいてみようかしら。

志摩子 どうぞ。

土希子 (気づいて) 叔母さん。

年江 何？

土希子 何でそんなに微笑んでらっしやるんですか。

年江 何？

土希子 (気づいて) 叔母さん。

年江 あら、そう？私、微笑んでる？

土希子 かなり。(志摩子に) ねえ。

志摩子 ええ。ふふ。

年江 そう？何でかしら。うふ。

土希子 ほら、今。

年江 え？

土希子 …もう、いいです。

年江 きつと何が、……………

土希子 ……………はい。

年江 …どうか、なのよ。

土希子 …え？

年江 うふふ。

土希子 ……………。

年江 それで、志摩子さんはどうなさるの？

志摩子 はい。

年江 これから。

志摩子 ……………結婚しようと思っっています。

年江 そう。

土希子 志摩子さん、それ…………。でも、誰と…………。

年江 小川君。ね、そうでしょ。

志摩子 (頷く) なんだかお受けしない訳にはいかないような気がした

んです。私のことを、私なんかのことをそんなにずっと想っていてく

ださって…………。

土希子 でも、志摩子さん…………

志摩子 昨日、小川さんのお母様から、初めてそのことを伺いました。

この二十年、決して口を開いたことがなかった小川さんが、声を、自

分の言葉と話したんだって。そして、それが私への想いだっただんです。

小川さんのお母さん、泣きながら、ごめんね、ごめんね…………。

でも、どうしても伝えなかったから…………。

年江 そう。

土希子 志摩子さん…………

志摩子 私は、高森さんに幸せにさせていただきました。この八年。だか

らもし、私が誰かを幸せにしてあげられるのだとしたら、それはそう

した方がいいような気がするんです。

年江 そうね。私もそうした方がいいような気がする。

土希子 叔母さん。

年江 それはだってそうなのよ、土希子ちゃん。

土希子 ……………。

志摩子 八年間、春と夏と秋と冬と、…………私は本当に幸せでした。も

う、それで十分です。これ以上幸せであることを、私は望んではいけ

ないような気がするんです。もう…………

土希子 分かった。…………分かったけど、…………なんだかもう一回父さ

んを失くしたような気がして…………。

土希子、ふと、家の方を見る。

土希子 ねえ、あそこから、ひよいとやって来ないかな。父さん。そう、

私のあの子と手をつなぎながら…………。だって初めての孫なんですも

の。笑ってるわね。凄く凄く笑ってるわね、二人とも。

年江も見る。

志摩子も見る。

けれど…………

…………

校舎の方から、オルガンの音とモリオの歌声が聞

こえる。

「告別」

…………

菜里子が、戻ってくる。

菜里子 すみません。
年江 さ、これでようやくみんな揃ったわね。(菜里子に席を示し) どうぞ。

菜里子、座る。
沈黙。

年江 あ。

三人、年江を見る。

年江 私ちよつと御手洗い。

三人、ふつと息を抜く。
年江、家の方へ歩いていく。
ふと立ち止まり、振り返る。

年江 ……………志摩子。

志摩子 (見る)

年江 ……………ちよつと行ってくる。

年江は、軽く微笑み、そのまま歩いていった……

土希子、ふと口ずさむ。

「鳥の唄」

土希子を見る、菜里子と志摩子。

やがて、二人も歌う…………

四

誰もいない。
志摩子が、コーヒーカップを二つ持って、家の方から歩いてくる。

志摩子 本当にいいお天気で良かった。

志摩子は、カップを置き、座る。

志摩子 さ、今日は何からお話ししましょうか。この間の作曲家のお話。チェコの。あのお話、まだ途中でしたよ。…でも、そうですね、今日はそのお話は止しましょうか。

志摩子 いっそはじめからお話ししてみましようか。折角ですから。本当のはじめから。

志摩子 そう、あなたは何故あの日、あそこにいらっしやったんですか。結局私、そのことを聞かず仕舞いでした。

志摩子 バスに乗るおつもりだったのですか。…いえ、違いますよね。だってあなた何も持っていらっしやらなかった。きつとお散歩でもなさってらっしやったんですね。それから私を見つけて…………。でも何もお声をかけなくても好かったのに。そんなに私、淋しそうでしたか。…………。本当はそうなのかもしれません。誰かに見つけてもらいたかった…………。あなたは私を見つけた。鳥が空から地上の一点を見つめるように、正確に。

志摩子 ……ええ、そうですね。あなたは鳥ではない。私の手を握るのは羽根ではなく、あなたの五本の指でしたし、いつも少し高めでしたけ

ど、体温も確かにありました。

志摩子　なんだかここに居てはいけないように感じていました、あの頃は。扉を間違つて開けてしまつて、寝間着姿のまま急に華やかな舞踏会に来てしまったような、そんな居たたまらない毎日だったんです。何かの間違いだつていつも思つていました。私が生きているのは。消えたかった。いなくなりました。父にも母にも、私は会つたことはないけれど、でもきつと、私が生まれてこなければ、二人はまだ幸せのままだった。誰が言つた訳でもないのに、そんな声がいつも響いていました。この耳の奥の奥の、もつと遠いところで。

志摩子　「もう、こりごりだ」…覚えてらっしゃいます？あなたいきなりそうおっしゃつて、私の隣にお座りになつた。私、吃驚して、声も出ませんでした。でも、構わずあなた、どんどんお話しになつて…：。何をおっしゃつていたのか、全然分かりませんでしたし、覚えてもいませんけど、でも最後におっしゃいましたよね、「このままバスに乗つて行きましょうか」つて。「戦争のない処に」つて。私、それ、つつきり一緒に死のうつてことだと思ひました。だから領いて、バスに乗つたんです。それなのにあなたは、そのバス停で降りると、すぐに近所の方に挨拶に行つて、この空き家をお借りになつた。それから借り物の鍋で晩御飯を手際よくつくつて、私に食べさせてくださった。私、まだ自分に何が起きてるんだか、分かりませんでした。だからきつと、朝になつたら、一緒に死ぬんだらうと思つて…：。でも、あなたはまだまた御飯をつくつてくださった。次の朝も、その次の朝も。ふふふ、私、何で気がつかなくつたんでしょう。そうじゃないんだつて。一週間、経つてました、気がついたら。私たちはただ、御飯をつくつて、食べて、つくつて、食べて、つくつて、食べて…：。ふふ。

志摩子　「志摩子」、…：…つてあなたが急にお呼びになつて、私、その名前もいゝかなくて、その名前なら生きていけるかもしれないって、

初めて、その時思ひました。私は、「志摩子」で、ここで、暮らす。他には何もないけど、それだけは、そのことだけは、確かに感じられたんです。その時。

志摩子　話をしましたね。それから、少しずつ。他愛もないような話。何処かの詩人の話、茄子の美味しい食べ方、ミソサイの名前の由来、モネの絵の色づかい、それから…：、風のこと、雨のこと、星のこと…：、あとは…：、歌。古い歌、それから、あなたが作つた歌…：。もう。「鳥の唄」。私、きつと私だけしか知らない歌だつて思ひ込んでました。…：。もう。そうじゃなかつたんですね。土希子さんも、菜里子さんも…：。

志摩子　怒つてなんかいませんよ。…：。ふふ、でも本当はちよつとだけ。

志摩子　…：。夫婦、だつたんでしょうか、私たち。恋人…：、なんだか少し違うような気がします。同居人…：、茶飲み友達…：、うーん、近いような…：。でも無理ですね。名前を付けるのなんて。あなたは、あなたで、私は、私で、ここで、コーヒーを飲んで…：、誰もそれに本当は名前なんて付けられない。…：。つて、これ、あなたがおっしゃつたんですつて…：。

志摩子、ふと口ずさむ。
「ユーモレスク」

志摩子　作曲家のお話。まだ途中でしたよ。その作曲家はどう過ごしたんですか、知らない初めてのその国で。どう生きたんですか。…：。ううん、それよりもお話ししてください。この六十年のこと。あなたの、その六十年のこと。

志摩子 最初に見た空、最初に見た海、最初に触った水、最初の泣いた記憶、最初の笑った記憶……。あなたは最初ちっちゃな赤ちゃんで、きつといっぱい泣いた。大きな声で。それから半ズボンをはいて、裸足で野山を駆け回った。叱られたんでしょ、いたずらいっぱいして。初恋は……。ううん、それは内緒ね。学生服、ふふ、着てらしたのね。丸坊主のイガグリ頭で。本をいっぱいお読みになるようになったのは、その頃から、それとも、暗くなるまで野球ばかりなさってたのですか。

志摩子 十六、十七、十八、十九、二十。二十一、二十二、二十三、二十四、二十五……。一年一年、一つずつ歳をとる。でもちゃんと、あなたにも私より若い頃があった。三十、四十、五十……。あなたはまだ私を見つけていない。そしてそれから、あなたは偶然あの時、あのバス停にやって来る。私も偶然あの時、あのバス停にやって来た……。……

志摩子 お話ししてください。六十年分。楽しかったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと……。私、まだその半分も伺ってないんです。

鳥が鳴く。

志摩子 ……ねえ、私たち、やっぱり一緒に死のうとしたんじゃないでしょうか。結局。あの日から、ゆっくりゆっくり、時間をかけて。もしかしら、これは心中なんですか。世界で一番のんびりとした。ふふ、そういうことなのかもしれないね。でも、だとしたら、私たちはしくじってしまったんですね。だって、あなただけ……

志摩子 志摩子です。私は。でもまだ、上手に生きていく自信がありません。……もう一度、……もう一度見つけてください。またあなたが、

生まれてきたら。私は生きて待っています。二百歳になろうと、三百歳になろうと……

志摩子、もう一度口ずさむ。

「ユーモレスク」

いつの間にか、空の色には茜がさしはじめている。

土希子、家の方から歩いてくる。

土希子 バス停の方にもいらつしやらないよ、叔母さん。こちらには戻ってらつしやらないでしょ、やっぱり。

志摩子 ええ。

菜里子が校舎の方から歩いてくる。

菜里子 こちらにもいらつしやらないようです、年江さん。

土希子 そう。何処に行ったのかしら。

菜里子 お手洗いっておっしゃってましたよね。

土希子 ええ。

菜里子 やっぱりもうお帰りになったんでしょうか。

土希子 でもバスはまだ……

菜里子 そうですね……

土希子 ……車、モリオさんの。

菜里子 ああ。

土希子 ……そういえば、モリオさんは。

菜里子 校舎の方にはいらつしやいませんでした。

土希子 まさか……

菜里子 え？

土希子 いやほら、さっきあんなことおっしゃってたから、叔母さん。

モリオさんのこと、いい男だつて。

菜里子 ああ。…え？

土希子 だからほら、二人で……

菜里子 ああ………

土希子 私ちよつと、モリオさんの車、見てくる。

菜里子 はい。

モリオ、校舎の方から歩いてくる。

モリオ 逆上がりしてみました。十何年ぶりに。…できませんでした。

一回目は。二回目もできませんでした。三回目、体がぐるつと回る時、海が見えました。空じゃありません。海です。だつて波の音が聞こえましたから。

菜里子 それはでもやつぱり、空だつたんじゃないですか。

モリオ 僕がもし鳥だとしたら、僕には空は見えません。僕から見える

青は、海だけです。……でも、そうですね、僕は鳥じゃなかった。

土希子 モリオさん。

モリオ はい。

土希子 叔母さんとお会いになつてらつしやらない？

モリオ いえ。

土希子 そう。私、もう一度、家の方、見てくる。

土希子、家の方へ歩いていく。

モリオ バスは、もうそろそろですか。

菜里子 はい。

モリオ そうですか。

志摩子、コーヒーカップを持って立ち上がる。

志摩子 すみません。私も少し、家の方に。

菜里子 (頷く)

志摩子、歩いていく。

菜里子、その後ろ姿を見送る。

菜里子 例えば、誰かが私の目の前でつまずき転ぶ。私は知らない振りをしてそのまま行き過ぎるか、それともそつと手を差し伸べるか……

モリオ きつとあなたは手を……

菜里子 例えば私の目の前に、消え入りそうな命が一つある。私は知らない振りをしてそのまま行き過ぎるか、それともそつと手を差し伸べるか……

モリオ 多分あなたは……

菜里子 そのことと引替えに全てを失うとしても？今の暮らしや家庭やその他の全て。それを失うとしても私は、そのたった一つの命のためにそつと手を差し伸べるでしょうか。

モリオ ……

菜里子 これは妄想です。これは誤解です。誰も正しくなんて理解はできません。……先生は、もしかしてそうしたのかもしれない。

全てを失いながらそつと手を差し伸べたのかもしれない。消え入り

そうな、志摩子さんの命を目の前にして。

モリオ ……

菜里子 だつて私たちはそうやって言ってきたじゃないですか。「戦場の子供たちの命を救え」。声高にいつもそう主張していました。私もあなたも、先生も。だから先生は本当にそうした。この戦場の、志摩子さんの命を……、先生の人生を賭して……

モリオ ……八年前、高森さんが消えたあの日、志摩子さんは死のう

としていた……

菜里子 妄想です。

モリオ そうかもしれません。それでもそんな一日は、人生の中で確かにあります。誰かの人生と、自分の人生が、偶然交わる日。例えば、バス停で。

菜里子 (モリオを見る)

モリオ 女はバスに乗ろうとしていた。男はバス停を通りかかった。たったそれだけの偶然。そしてバスは出発する。男のと、女のと、二人分の偶然を乗せて。

菜里子 モリオさん。

モリオ はい。

菜里子 「帰らない」、あなたは先刻そうおっしゃった、音楽室で。

モリオ はい。

菜里子 そうして、けれど一体どうなさるのですか。

モリオ 行きます。

菜里子 何処に？

モリオ 行く先はきつとありません。辿り着いたその場所、それが行く先なんだと思います。バスに導かれ帰れなくなった者は、もう行くより他にないんですから。差し当たり、戦争でも止めに行つてきましよう。その旅の中で、僕も偶然出会うかもしれません。消え入りするような一つの命に。それはきつとあなたではなく、あなたの子供か、あなたの孫か……。僕はいつかその命に出会う。

菜里子 モリオさん。…その旅、私も……

モリオ ？

土希子の笑い声が聞こえる。

家の方から歩いてくる。

モリオ どうしたんですか？

土希子 ううん、可笑しくて……。どうして私たち、あんなに簡単に信じ込んでしまったのかしら。

モリオ 何のことですか。

土希子 叔母さん。ううん、あの、小母ちゃん。

志摩子も歩いてくる。

モリオ いらつしやつたんですか？

土希子 ううん、いらつしやるどころか……。 (志摩子に) ねえ。

志摩子 ……。

土希子 ないのよ。

モリオ 何が。

土希子 香典。

モリオ え？

土希子 だから、香典がなくなつてるの。

モリオ え？

土希子 つまりそういうこと。

モリオ 何かの間違いじゃ？

土希子 ううん。

モリオ (志摩子に) 本当にないんですか。

志摩子 (頷く)

土希子 ふふふ。完全ね。完全なる幻。父さんの妹だなんて……。

モリオ 何処かちよつとお出掛けになつてるんじゃないですか。その、

香典とは関係なく。でなければ、御手洗いにでも隠れて、みなさんを

驚かそうと思つてらつしやる。

土希子 いなかった。御手洗いにも、何処にも。

モリオ ……。

土希子 (志摩子に) そもそもいつ現れたの、あの、人。

志摩子 ……。確か、お通夜の時に……

土希子 え？最期、志摩子さんと一緒に看取つたんじゃないの？

志摩子 いえ、最期は私と高森さんと二人きりでしたから。

土希子 ふふ、やっぱり。…あの人、そこに居合わせたかのように話した、父さんの最期のこと。(菜里子に) ねえ。

菜里子 ええ。

土希子 私それすっかり信じちゃって…………。

志摩子 あの、方は、何て？

土希子 静かに笑ってたって…………。穏やかだったって…………。それか

ら、私の名前、呼んでくれたって…………。

志摩子 ……………。そうでした。

土希子 ？

志摩子 高森さん、最期は本当に、そうでした。

土希子 ……………。私の名前を…………

志摩子 ええ。

土希子 ……………。

菜里子、ふと手にしたカスタネットを鳴らす。

菜里子 そうなんでしょうか。あの方、先生の妹じゃないんでしょうか。

…でも、いろんなこと知ってらっしゃった。私の子供のことや、土希

子さんの…………

土希子 ……………。誰、あの人…………。

沈黙。

モリオ あ。

モリオ、慌てて内ポケットから三通の手紙を取り出す。

モリオ これ。

土希子 何？

モリオ 忘れてました。すみません。

土希子 これは？

モリオ あの人に預かったんです。私が帰ったら、三人に渡して欲しいって。

土希子、菜里子、志摩子、それぞれ手紙を受け取り、開く。

読む。

しばらくして、三人は同時に笑いだす。

モリオ どうしたんですか？何て書いてあるんですか？

土希子 「土希子ちゃんへ」

菜里子 「菜里子ちゃんへ」

志摩子 「志摩子、義姉さんへ」

三人 「ごめんさい。急にいなくなつて。そしてありがとう。千ちゃんを、高森千吾という一人の人間をきちんと見送つてくださつて。ここからがあなたの新世界です。でもきつと大丈夫…………。かも。生きて、生き続けてください。あなたの、あなたの、あなたの、年江ちゃんでした。追伸。似顔絵描いてみました。どう？似てるでしょ。」

土希子 見て、私、クマの顔になつてる。

菜里子 私、リスです。

土希子 志摩子さんは？

志摩子 ……サル。

三人 ふふふ。

菜里子 「裏を見よ」って書いてありますよ。

土希子 本当だ。

三人、手紙を裏返し、読む。

三人 「千ちゃんから預かっていたものがあります。あなたに。音楽室に置いておきます。」

三人、顔を見合わせ、音楽室へと歩いていく。
菜里子は行きかけて立ち止まり、

菜里子（モリオに）ちよつと待っていてください。間に合わない時は、バスに間に合わない時は乗せていってください。あなたのその車に。

菜里子も歩いていく。

モリオ ……遺言。立ち去る者が残す言葉が遺言だとしたら、これもまた、遺言なのかもしれません。……僕はどうかやら、間違つて覚えていました。鳥になった男の話。あれは、男が鳥になったのではなく、鳥が男になった、そんな話でした。きつと。…鳥がいた。人間になりたがっている鳥。そいつはいつも空から地上を眺めながら願っていた。人間になりたい。ある朝、そいつは願いが叶い、本当に人間になる。両の足を地面に着け、風に向かって立つ。…だけど、ここから先がどうしても思い出せません。この話。人間になった鳥の話。…そいつは、どうしたんですか？鳥になった男が、鳥であり続けるため、ひたすら羽ばたき続けたように、そいつは、ひたすら、何をしたんですか、人間であり続けるため。何を止めなかつたんですか？人間であろうとして。…それが分かれば……。今、それが分かれば……。

モリオ、家の方へと歩いていく。

校舎の方から三人の歌声とオルガンの音が聞こえてくる。

「森へ行きましょう」

三人は、歌いながら歩いてくる。
色鮮やかな服に身を包み、微笑みながら……

やがて靴さえも脱ぎ捨て裸足になった三人は、机の上に立ち、大声で歌う。

笑い合う三人。

鳥が鳴く。

遠く聞こえるのは波の音だろうか。

そして、

空を見上げる三人の女がそこにいる……

——終——